

三浦哲郎

# 夜の哀しみ(上)



新潮社

# 夜の哀しみ(上)

三浦哲郎

新潮社

夜の哀しみ 上巻

著者 三浦哲郎

発行 一九九三年二月二〇日

七刷 一九九三年八月二五日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 営業〇三(3266)五一一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

夜の哀しみ 上巻 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 寝台を吹く風  | 123 |
| 夜露のやさしさ | 97  |
| 不意のほとけ  | 71  |
| たまさかの慰み | 45  |
| 見知らぬ自分  | 25  |
| 満ちてくるもの | 7   |

ふしだらな月

153

こがらしの鼻唄

185

つらら酒

221

物憂い春

255

一瞬の悪魔

289

装  
幀  
・  
司  
  
修

夜の哀しみ

上巻





## 満ちてくるもの

登世は、また寝返りを打った。

洗いざらしの、元の色がわからなくなったネルの寝巻のすそがはだけて、うすやみのなかに、片方の脚が腿ももの付け根のあたりからほの白くむき出しになった。

眠りこけているわけでもないのに、寝返りを打つたびに寝姿がしどけなくなる。けれども、登世は投げやりな気持で、夜具や身につけているものの乱れを直そうともしない。

大概の夜は、枕元の目覚時計の夜光塗料しか見えない暗やみの寝部屋が、今夜は天井のない屋根をくり抜いた明かり取りの窓から差し込む月の光で、珍しくほの明るい。

けれども、登世が眠れずに寝返りばかり打っているのは、そのせいではない。

天窓から差し込む月の光は、貧弱な梁はりの間をくぐり抜けて、登世が寝ている右隣のささくれ立った畳の上に落ちていた。そこには、これまで夫の三作さんさくが寝ていたのだが、夫は十日ほど前、村の出稼ぎ仲間と一緒に東京へ発ってしまった。

出発の二、三日前に、夫が屋根に登って、天窓のガラスを汚していた海鳥の糞をこそげ落してくれたおかげで、今夜の月の光は澄んで青味を帯びている。

そのさまが、なにかに似ている、と登世は眺め、自分が生まれ育った山村のちいさな滝を思い出した。ちいさくても水量が豊かで、滝壺からあふれる水は夏のさかりでも手がしびれるほどに冷たかった。力仕事の汗を流す男たちの唇がみな紫色になっていたのを、登世は憶えている。

まさか、と登世は自分の愚かな思いつきをあざけりながらも、寝たまま、月の光が溜まっている方へ、両ひじと腰とで、芋虫のように動いていった。片脚だけでなく、もう一方の脚も、下腹も、むき出しになった。敷布団から外れると、たちまち畳のささくれがむき出しになった素肌を刺してきた。

けれども、月光は在所どしよの滝ではない。当然のことながら、月は素肌に冷たくもなんともなかった。登世は、布団に戻るのも大儀であつた。畳に寝たまま、無言の叫びを上げた。

——誰でもいい、どうにかして、早くこのからだの芯のほてりをいやしてけれ。

そのからだの芯の気恥ずかしいばかりのほてりは、夫が出稼ぎに発った晩のうちにじまつたのだ。

夜、寝部屋の明かりを落してから、いつものならわしで隣に寝ているはずの夫へ右手を伸ばし、ささくれ立った畳をむなしくなでて、そうか、今夜から当分の間あの人は身近にいないのだつたと改めて思ったときから、急にからだの芯が熱を帯びたようであつた。

それが、そのあと三、四日はつづいたとしても、登世は別段おかしいとも思わなかつたろう。夫の上京の日がきまつてからは、夜となく昼となく、人目のないところで二人きりになれさえす

れば、幾度でもしばしの別れを惜しんだのだから、からだのほてりが容易に冷めなくとも不思議ではない。

ところが、もう十日にもなるというのに、ほてりは鎮まるところか、夜ごとにすこしずつ激しくなるばかりである。登世は、自分のからだのことながら、どこがどうなったものやら見当がつかない。

三十を過ぎたところから、自分のからだはすみずみまで掌握できたと思ひ込んでいたのだが、どうやら独り合点にすぎなかったようだ。女のほてりが不可解なのだから、灯台もと暗しだったというほかはない。

登世は、のろのろと身を起こした。尻や、腿の裏側や、ふくらはぎを、畳のささくれがちくちく刺すのがむしろ快かった。のつぺりと白い腿や、膝や、脛すねが、月の光を浴びていた。登世は、天窓を仰いでみた。月は見えないが、夜明けのように明るんだ空が見えている。

こんな明るい夜には、ひんやりとした浜風をふところに入れながら、いつとき、ぶらぶら歩きを試みても悪くはないかもしれない。登世はそう思い、渚に落ちる波音が間遠くて穏やかなのを確かめながら、枕元の上つ張りを肩に羽織つて立ち上がった。

すると、左の腿の内側を、ゆっくり滑り落ちてくるひとすじの生温いものがある。

登世は思わず舌うちした。なんて間が悪いのだろう。けれども、明かりをつけて、ティッシュでぬぐい上げてみると、それは登世の予想したものとは違っていた。なにやら無色の、ゆるいねばり気のある液体であった。

登世は拍子ぬけして、ちよつとの間、汚れたティッシュを捨てるのを忘れていた。

いまのは、なんだつたらう。

まさか、小水なんぞであるはずがない。なにかは知らぬが、寝ている間に出口の近くの窪みに溜まっていたのが、立ち上がったとたんにあふれて、流れ出たのだ。

登世には初めての経験であった。不安が、ちらと胸をかすめた。自分は病気なのではなからうか。いつの間にやら、からだの芯が病んでいて、そこが発熱してからだをほてらせ、いまやこんな得体の知れないものまでひそかに蓄えるようになっていいるのではあるまいか。

登世は、こんなうす気味の悪い汚物を家のなかには捨てたくなくて、新しいティッシュを何枚か重ねてそれを包み込むと、上っ張りのポケットに入れて寝部屋を出た。

隣は子供部屋で、小学校五年生の克夫と三年生の敏恵とが、浜へ出る路地に面した窓ぎわに、父親の出稼ぎ土産の、そろいの机を並べている。登世は、ぐっすり眠っている二人の寝相を直してやってから、土間へ降りてゴム草履をはいた。

八月も末近くになっていたが、例年なら、東北も北はずれのこのあたりでは、早くも日増しに秋の気配が濃くなり始めるころなのに、今年は、どういうものか、月遅れの盆が過ぎてから珍しく暑さがぶり返し、残暑と呼ぶには身に応えすぎるほどの暑さがここ四、五日つづいている。

それで、登世も、もしかしたら自分のからだのほてりもこの異様な暑さのせいではないかしらと、内心一縷の望みを抱いているのだが、こんなに夜がふけてしまうと、寝巻のすそを吹き乱す浜風はさすがに冷え冷えとしているのに、登世のほてりはいっこうに鎮まる気配がない。

渚に崩れ落ちる波がしらが月明かりに白く見えていた。黒く荒涼とした砂鉄の浜だが、今夜は貝殻が星屑のように輝いていて、打ち揚げられた流木に足を取られずに済みそうである。

登世は、まだ昼の暑さのなごりを留めている砂を素足の甲に浴びながら、広い浜へ出ていった。すると、渚との中間あたりに、ちろちろと揺れる火が一つ見えた。

まちからきた人なら、こんな夜ふけの砂浜で、ちいさな炎がいまにも漂い出しそうに揺らめいているのを見れば、あれ、ひとだま、と肝を潰すかもしれないが、登世はすこしも驚かない。

この集落では、以前から、なにかやっかいな焼却物は日が落ちてから浜の窪みでひっそり焼くのがならわしだからだ。

火は、いちど消えたと思って、何時間もしてから浜風に煽られて、また炎を上げはじめることがある。けれども、どうということもない。火が窪みの外へ這い出るとはまず考えられないし、火が飛んだところで、あたりに燃えると困るものがなにもないのだ。舟小屋もなければ、舟もない。

あの火でポケットのなかのティッシュの玉を焼こう。それから、ついでに砂をかけて火を消してやろう。登世は、そんなつもりでその方へ歩いていった。

浅い砂の窪みの底で、勢いのない火がくすぶるように燃えていた。いちど消したつもりの火が、またひとりでに燃え出したのではなかった。窪みのふちに、棒を持った人がちいさくうずくまっています、おぼつかない手つきで火を突っついていた。

「お晩でやんす。」

登世はすこし離れたところから声をかけた。相手は誰かわからなかったが、いずれこのあたりの住人にきまっている。

「ほうい、登世ちゃか。」

と、うずくまっている人がいった。

お互いに声で相手がわかった。窪みのふちにいる人は、思いがけないことに近所のたよ婆さんであった。まさか、八十を越した老婆が、こんな夜ふけに独りで浜にいたとは思わなかったから、登世は、おいたあ、と驚きの声を洩らした。

「たよ婆っちゃじゃねすか。こつたらとこで、なにしてるんで？」

「見たらわかるべさ。こつばずかしい雑誌を焼いてるのせ。」

窪みの底には、くすぶっている数冊のそばに、まだ二十冊ほどの週刊誌が積み上げてある。たよが棒の先でいらだたしげに炎のまわりを突つくと、子供の花火のような火の粉が散ってグラビアの裸婦を照らした。

たよは、棒でさかんに火の粉を散らしながら、愚痴をこぼした。

「この雑誌はな、みんなおら方の桂太が集めたのし。どこをひらいても裸の女ごの写真が出てくる雑誌だえ。まだ成人式も済ませぬうちから、こつたらえげつないものに凝るなんて……誰に似たる。先祖に、やたらな色好みでもいたろうか。」

桂太というのは、たよの末孫で、大工の見習をしているが、つい二、三日前から親方に連れられて隣県へ働きに出かけている。

「見習でも、手間賃ぐらいはもらおうから、好きなものはなんでもおのれのお金で買うがええ。裸の女ごの写真にしても、断じて買うなどはいえねえさ。したが、そいつを家まで持ってくるなつていうのよ、おらは。途中の芥箱にでも捨ててこうつて。それなのに、桂太のやつ、大事そうに持って帰って、枕元に積んどくのせ。おらはもう、こつたらえげつない、こつばずかしいものが

おのれの家のなかにあると思うだけで、気色が悪くて生きた心地がしねえんだ。だすけ、あいつの留守にみんな灰にしてやるべえと思うてな。」

「婆っちゃん、その棒をおらにちよつと貸してみれ。」

老婆がいつまでも火の粉を散らすばかりなのを見かねて、登世は、窪みの向かい側のふちにしやがむと、流木から折り取ったらしい細長い枝を受け取った。

「紙って、重ねたままでは案外燃えにくいもんでな。」

そういうながら、棒の先で週刊誌を屋根のようにひらいて、火の上に載せると、やがてめらめらと炎が大きくなった。二人は、しゃがんだまますこし後退りした。肌着に、つぎはぎだらけのお腰だけの老婆が、あかあかと照らし出された。

「きれいな肌して……おめさん、餅肌もちよだよな。」

たよにそういわれて、登世はあわてて寝巻のすそを膝の間に押し込んだ。炎は、たよばかりではなく自分をも照らしているのだ。

「餅は餅でも、おらのは栗餅あわもちで……。」

そそくさと積み上げてある週刊誌の山を崩すと、なかの一冊が炎のそばに落ちて、ひとりでひらいた。《淫乱妻》という大きな活字が登世の目に飛び込んできた。

登世は、なぜか胸がどきりとした。

炎に照らされた大きな活字には、《いんらんづま》と振り仮名がしてあった。それを、思わず身を乗り出して読み取った自分に、登世は気づいてどぎまぎした。

いんらん、とは、どういうことだろう。



「おめさん、なんぼになった。」

と、たよがいった。

「三十五になりゃんした。」

「三十五な……せつない齡とになったな。」

登世は、返事のしようがなくて、〈淫乱妻〉が炎になめられて消えていくのを黙って見守っていた。

「おめさん、こつたら時間に、なにしに浜さきたのし。」

「この火が見えたすけ、なんだえなあと思うてな。」

とつさにそんな出任せをいうと、

「ほうい、おめさんの家からこの火が見えたど……屋根さでも昇つとつたのかえ？」

たよは、齒のない齒莖をまる出しにした。登世は口をつぐんで、目を伏せていた。平屋の自分の家からは、間に防砂林があつて浜は見えないのだ。それを、もう六十年あまりもこの浜の村に住みつづけているたよは、ちゃんと知っている。

「亭主と離れて、寂しくてだえせ。」

若妻のように、その通りだとうなずくわけにもいかないから、

「昼のほとぼりで、寝苦しくてな。」

と登世はいった。

「なあに、時が経てば馴れるもんせ、亭主がそばにいなえことにも、寝苦しいことにも。だけんど、三十五っていえば、おらにもせつない齡だった。なんしろ、亭主に死なれた齡だもんな。」